

2014年3月9日 礼拝メッセージ

聖書：第二サムエル記1章17～27節

説教：あなたのために私は悲しむ

1 サウルとその息子ヨナタン

1) ダビデを憎むサウル

イスラエルの王であったサウルが、ペリシテ人との戦いで倒れたとの知らせをダビデは聞きます。かつてサウルの部下であったとき、イスラエルのため、サウルのために彼は一生懸命力を働きました。人々はそんなダビデの活躍を見て、こんなはやり歌を歌います。「サウルは千を打ち、ダビデは万を打った。」誰の目にも、ダビデはサウルをしのぐほどの力を持つようになったのです。これを聞いてサウルはダビデをねたみ始めます。精神的に不安定になり、ダビデを殺そうと決心します。その結果、ダビデは名誉や財産はのちろん、信頼していた友人に裏切られ、密告されていきます。彼は、ただ神に忠実に従っただけです。それなのにどうしてこんな目に遭わなければならないのか。サウルを殺してやりたいとダビデは何度も思いました。しかしサウルは主に油注がれたイスラエルの王です。どんな理由があろうとも絶対に手を下してはならないのです。ダビデは、苦しみながらこのことを徹底的に学ばなければなりません。

2) ダビデを愛するヨナタン

ダビデはもう一つの悲しい知らせを聞きます。サウルの息子であるヨナタンも戦場で倒れたというのです。ヨナタンとダビデとは特別な関係があります。

サウルがダビデを殺そうと思い始めた頃のことです。サウルの息子ヨナタンは、親友

のダビデとの間で板挟みになり、大変心を痛めます。なんとかダビデが助かるようにと父サウルのとりなしてみます。しかし、父の決心は変わりません。ヨナタンは、父を捨ててダビデにつくかどうか悩んだ末に父のもとに残ることに決めます。そして、ダビデをなんとか安全に逃がすことを考えます。けれども、ダビデと直接会って、ことばを交わすことはあまりにも危険です。見つければダビデがそこで殺されてしまうからです。そこでヨナタンは、野原に出て矢を遠くに放ちます。そして連れて行った少年にこう叫ぶのです。

「矢は、おまえより、もっと向こうではないのか。早く。逃げ。止まってはいけない。」

ダビデは野に隠れていてヨナタンの声を聞いています。ヨナタンのことばはふたりの間で取り決めた暗号になっていました。「ダビデ。おまえは早くここから逃げなければならない。止まってはいけない。」そう言っているのです。

ヨナタンはイスラエル王の息子ですから、本来なら父を継いで次の王となるのが約束された人です。でも、ヨナタンはダビデがイスラエルの王となることを信仰によって確信しています。それは何を意味するのでしょうか。自分が死ぬということです。皮肉なことですが、父に内緒でダビデを逃がすことは、自分が死ぬことになるのです。ダビデはそのことを知っていました。ヨナタンと別れるとき、男泣きに泣きます。

ダビデは22節で、「ヨナタンの弓は、退いたことがなく」と歌っています。ヨナタンは

戦いの勇士であったという意味ですが、「ヨナタンの信仰は退いたことがない」、そのような意味としても読むことができます。

ダビデのめに進んで自分のいのちを捨てたヨナタン。「矢は、おまえより、もっと向こうではないのか。」と叫んで、ダビデの信仰を励ましてくれたヨナタン。ダビデは、「あなたのために私は悲しむ」と告白し、喪に服します。

3) 生きているときにも、死ぬときにも離れることなく

サウルとヨナタン、まったく対照的な親子でした。そのふたりについてダビデはこう歌っています。23節。「生きているときにも、死ぬときにも離れることなく、驚よりも速く、雄獅子よりも強かった。」

皆さんは、このふたりの親子を読んで思わないでしょうか。「サウルはひどい王であったから死ぬのは仕方がない。けれども息子ヨナタンはかわいそうだ。これほどの立派な信仰者が、愚かな父親のためにいのちを落とすなんてもったいない。さっさとサウルに見切りをつけ、ダビデにつけばもっとすばらしい人生を送ることができ、神さまのためにも大きな働きができたはずだ。」

ダビデはどのように評価したか。どんなに愚かな父親であり、たとえ親友ダビデを殺そうとした父親であっても、ヨナタンは決して父親を見捨てようとしなかった。そのことを高く評価しているのです。

ダビデの時代、日本で言えばまさに戦国時代そのものです。常に戦いがあり、父と子の間柄であろうが、王座を奪うためなら平気で裏切る。そんなことが当たり前起きた時代です。ダビデも老人になってから、自分の息

子にいのちを狙われ、あやうく王座を奪われそうになったくらいです。ヨナタンが父親を裏切ってダビデにつくということは、十分にあり得る話でした。けれども、ヨナタンは父を裏切りません。父に従い続け、最期は死をともにしていきます。

親に忠実であったのですばらしいと言っているのでしょうか。でもそれでは、単なる道徳の話です。ヨナタンは信仰者です。信仰者ならば、もっと祝福された人生を歩むはずではないのか。どこにも祝福が見えない。ヨナタンのように死にたくない。おそらくそう考える方もいるでしょう。

2 ダビデの悲しみと祈り

ダビデの時代からおよそ千年が経ち、イエス・キリストが救い主となって来られます。マタイの福音書の冒頭には、「アブラハムの子孫、ダビデの子孫、イエス・キリストの系図」と、わざわざ断り書きがあつて、主がダビデの子孫として来られたことを強調しています。なぜそんなに大切なのでしょう。大きな意味があります。ダビデが経験すること、ダビデが語ること、すべてが主イエスとつながりがるからです。たとえば今日の箇所で、ダビデが悲しむというのであれば、主も悲しんでいるというふうにつながっていきます。

ダビデはかけがえのない親友を亡くし悲しみます。愛する者を失ってしまったことを悲しみます。ヨナタンともう一度会いたい、ヨナタンともう一度あのすばらしい時間を持ちたい、同じ神を信じる信仰者として喜びをともにしたい。心から願うのですが、この地上においては絶対にはかなえられない。そのことを悲しみます。

ダビデの子孫として来られた主は、ダビデ

の悲しみを知っておられます。知ってどうされるのですか。主は、私たちの悲しみを喜びに変えるために来てくださったのではないですか。主は何をしますか。ヨナタンを死から救い出してくさいます。それが主の約束です。

「主の約束を信じているクリスチャンは、葬儀の場では悲しい顔をしてはいけな」と、だれかが言ったことがあるそうです。とんでもありません。悲しいときに悲しむ。思いっきり涙を流す。愛する者の死を悲しむのは、祈りだと私は思うのです。悲しみの涙を流しながら、私たちは神に祈っているのです。愛する者を返してほしい。そう願っています。ダビデも悲しみましました。決して不信仰という意味ではないことを覚えていただきたいと思います。

3 「私の人生は台無しだ」と嘆く者へ

最後にヨナタンの生き方、死に方から見てくることを考えたいと思います。少し冷めた見方をするなら、ヨナタンは、だめな父親を持ったために大変不幸な人生を送らなければならなくなった被害者であると言えるかもしれません。よく考えると、私たちも同じようなことで苦しんでいます。

私も、自分の父親のことで苦しんだ時期がありました。どんなことをしても父から褒められたことはほとんどありません。父に愛されたという記憶がほとんどありません。こんな父親さえいかなかったら、自分の人生はもっと違ったものになったのではないかと、父を恨んだことがありました。

自分の親を選ぶことはできません。同じように、自分の子どもを選べません。家族を選ぶことはできません。あの兄のせいで、あの

弟のせいで、自分の人生は台無しにされてしまった。ずっと心の深い所に怒りや憎しみを抱えたまま苦しんでいる方がたくさんいらっしゃいます。

どう考えたらよいのでしょうか。今日の箇所から二つの希望を見ることができます。

一つ目。ヨナタンは父に従うことに悩み苦しみました。もし人のいのちが地上で終わるのなら、ヨナタンは全く愚かな死に方をしたということになります。でも先ほど言ったように、主はダビデの悲しみの祈りを聞き届けてくださり、ヨナタンの生涯をもっとすばらしいものに取り戻して行かれます。ということはどうなるか。あの人のせいで私の人生は台無しになったと、嘆いている方に知っていただきたい。あなたの人生は、絶対に台無しにはならない。主がいのちをかけて取り戻してくださいます。それが一つ目の希望です。

二つ目の希望。信仰者ヨナタンは、だめな父親サウルのために死んでいきます。そのことに何か意味があるのでしょうか。ヨナタンがサウルとともに死ぬことで、サウルが救われることになります。もしあなたが、自分は誰かの犠牲になってしまった。あの人のせいで自分の人生はめちゃくちゃになってしまったと思っているなら、あなたは大切な役割を神さまから委ねられているのかもしれない。あなたを苦しめている人が救われるために、あなたは苦しみを受けているのかもしれないのです。

意外なことを言ったでしょうか。でも、主がしてくださったことは、そういうことではなかったのですか。主は、私たちのせいで人生を台無しにされてしまったのです。無実の罪を着せられ、十字架につるされました。そ

れでも文句一つ言わず、ヨナタンのように死に従われました。愚かな私たちのために従ってくださった結果、私たちが救われたのです。

私たちも同じ道を歩むことになります。もし、あなたが誰かのせいで苦しみにあっているのなら、あなたの苦しみは誰かを救うためにあるのかもしれない。そんなことを考えるのもいやでしょう。多くの方は怒るでしょう。でも、そういうことを主がして下さいましたことを知っていただきたいと思います。